

文化情報学部
完成報告書

2010年7月30日

同志社大学

文化情報学部完成報告書

1 教育目標

次のような技能、態度、知識を涵養する。

1. 文化と人間に関する複雑で捉えがたい現象に対し、仮説形成、データ生成、仮説検証に基づく科学的探究を行える技能
2. 文理の枠にとらわれず、他者の視点も取り入れて柔軟な発想を行う態度
3. 基礎から応用までのデータサイエンスの知見と、文化領域の幅広い知識を探究目的に応用する実践的知識

特色

本学部は、科学的探究の技能と、文理の枠にとらわれず柔軟に発想する態度を重視する点で、特定の専門領域に限られない中核能力の涵養を目的としている。また、目標とする中核能力を「社会人として働く一般的能力」として広く定義するのではなく、焦点を科学的探究の能力に絞っている点、さらに、文系リベラルアーツ教育と異なり、数理科学、統計科学、情報科学が提供する知識と技術の中で、とくに科学的探究の基盤として重要なものを集約したデータサイエンスの実践力としての中核能力を重視する点に特徴がある。科学的方法を文化と人間の問題に適用する方法を専門的に教える学部は他に類がなく、文化と人間を対象とする問題発見・問題解決の専門家が育成される。

2 教育内容・方法

カリキュラムの配置

上記の教育目標を達成するために、必修科目、選択科目I・II、自由科目によって構成される探究志向のカリキュラムを配置する。

必修科目は、文化と人間に関わる仮説形成、データ生成、仮説検証からなる科学的調査の方法を修得することを到達目標とし、1年次から3年次にかけて体験と主体的参加を特徴とする実験・演習科目9単位と卒業研究7単位を履修する。実験・演習科目は、他者の視点を取り入れながら共同作業を行う能力を養うため、履修者間のジョイント・リサーチを必須とする。これらの経験に基づいて卒業研究を実施し、卒業論文を執筆する。

選択科目IはA群～C群からなる。このうちA群は、必修科目で行う研究の対象となる幅広い文化領域の知識を得ることを到達目標とし、1年次から3年次にかけて文化科目群、言語科目群、人間社会科目群、人間行動科目群からなる講義科目20単位以上を選択履修する。B群は、必修科目で行う研究の科学的方法のベースとなるデータサイエンスの知識を習得することを到達目標とし、1年次から3年次にかけてデータ分析科目群、基礎数理科目群、情報コンピュータ科目群からなる講義・演習科目18単位以上を選択履修する。C群は、文化と人間に対する知的好奇心や学問的興味をもつと同時に、その科学的探究の重要性を理解することを到達目標とし、1年次から3年次にかけて各界の専門家による講義科目4単位以上を選択履修する。

選択科目IIは同志社建学の精神をはじめ、キャリア形成、人文科学、社会科学、自然科学など、幅広い教養を得るD群（16単位以上）、英語の実践的な運用能力を習得するE群（8単位以上）、英語以外の外国語の基礎的運用能力を習得するF群（4単位以上）、免許・資格の取得に必要な知識・技能を習得し、個々人の興味に応じて知識・技能を補完するG群（必要に応じた単位数）からなる。

総合的な視野、自主的・批判的思考、豊かな人間性・高い倫理観の養成

本カリキュラムの必修科目は、体験と主体的参加を特徴とする探究型科目（実験・演習科目9単位と卒業研究7単位）で占められており、本学部のすべての学生が、あいまいな現象を自分で抽象化し、不揃いなデータを自分で関連づけ、検証に失敗したら実験をやり直すという主体的探究活動の経験を得る。これは、多くの高等学校教育における知識投下型授業で得られる経験とは本質的に異なり、総合的な視野、自主的・批判的思考を養う機会となる。ただし、こうした視野や能力は、単独の探究活動では育ちにくく、すでにそれをもった人物との直接的な交流の中で養われるため、これらの科目に可能な限り多くの専任教員を配置し、最良のST比のもとに実施している。

また、必修の実験・演習科目（9単位）は「ジョイント・リサーチ」という名称のもとに、履修者間の共同作業による探究活動を行うことを必須としている。豊かな人間性、高い倫理観、そして本学の建学の精神に盛り込まれている良心は、他人との関係の中でしか発揮されず、また磨かれない。答えが待っているとは限らない「探究」という心理的負荷のもとで、共同作業のメンバーがこれを分かち合い、担当教員がこれを適切に評価・奨励することで、豊かな人間性、高い倫理観、良心が磨かれるように設計されている。

導入教育

本学部では、1年生を対象にした必修科目として「コロキウム」を設け、全専任教員が分担して少人数クラスの導入教育を行っている。この科目では、文献の探し方、レポートの書き方、講義ノートの取り方、研究テーマのを見つけ方などのリテラシー教育を行う一方で、4年生による卒業研究発表会を実施し、この学部で勉強することでどのような専門性が得られるのかについて、1年生の段階で具体的な見通しを得る機会を与えている。また、担当教員の創意工夫により、博物館見学や講演会参加など、1年生に様々な文化的体験をさせる機会を設けており、文化と人間を対象とした探究心を呼び起こさせる工夫をしている。

また、本学部は、文理の枠にとらわれず柔軟な発想を行う態度を教育目標にしているため、高等学校で文系の教育課程を経た学生に対し、どのようにしてより高度な数理系の知識や考え方に親しませるかが重要課題となる。そこで、本学部では高等学校の数学III・数学Cの復習を含んだ「数学入門」を配置し、文系教育課程出身者に履修を薦めている。これと別に、実習助手による「数学補習講座」を定期的に関き、数理系の考え方に親しむ上でハードルとなりうる箇所を重点的にカバーしている。また、実習助手による「質問コーナー」を学期中の月～金曜午後1時～午後8時まで設け、学生の個別の質問に対応している。

履修指導

履修指導においては、まずカリキュラム自体がわかりやすく提示されていなければならないという認識のもと、担当者にかかわらず科目で教える必須の内容を簡潔に記した「科目説明」（米国大学におけるcourse descriptionに相当）を全科目について整備し、一覧にしている。さらに、各科目の役割分担や事前履修推奨関係を示した履修体系図や、多くの学生の将来計画や関心に応じた履修モデルを作成している。これらは、入学時と新年度開始に配布する履修要項やシラバス集に掲載すると同時に、学部のウェブサイトにおいても公開しており、学生が長期ビジョンにたって履修計画を立てることを促進している。

このような資料の基礎の上に、入学時と新年度開始時にはカリキュラムや履修方法についての説明会と個別相談会を実施している。また、クラス担任制のもと、各学生が必要に応じて担任教員から履修指導を受ける機会を確保している。また、毎年度の始まりに、取得単位数が少なく、GPAが著しく低い学生を調査し、クラス担任との面接による助言・指導を徹底し、制度化している。

年間登録単位数の上限

年間登録単位数の上限は48単位である。

授業評価

すべての学期・科目において、学部で統一した質問項目12項目と、教員の自主的な質問項目2項目、さらに自由記述2項目による授業評価を実施している。授業評価の結果は、同学期開講の他の科目に対する評価結果の平均データとともに、担当教員にフィードバックされる。また、全学的措置として、授業評価の各項目の平均点を学部・クラス規模ごとに集計し、WEBを通じて全学生に公開している。各担当教員は、授業評価のフィードバックを授業改善の参考にするとともに、授業についての講評を履修学生に伝える制度が設けられており、授業について双方向の対話が行われるように配慮されている。

ファカルティ・ディベロップメント

学部開設と同時に、学内ファカルティ・ディベロップメント委員会を設置し、その主導のもとに、すぐれた教育実践に関する情報交換会やワークショップを実施してきた。また、学内外で開催される大学教育に関する多くの会議やワークショップに専任教員を派遣し、大学教育の現状やすぐれた教育実践に関する知識のレベルを学部全体で上げるための措置がとられている。

これに加え、平成21年度より、本学部の自己点検・評価委員会をファカルティ・ディベロップメントの一貫として活用する試みを行っている。この委員会の目的は、学部の研究・教育実践についてきめ細かな自己点検を行い、必要な改善策を講じ、新たな方針や構想を検討することであり、委員7名のうち4名は全専任教員による選挙で選ばれ、専任教員はだれでも委員会に参加し意見を述べることができる。委員会は月1回～4回開催され、自由な雰囲気の中、自主参加の教員を含む15名前後（全専任教員の半数強）によって活発な議論が行われている。この制度により、専任教員は学部の教育プログラムが抱える問題や、全体で行う教育の質に対するより強い当事者意識を育て、ひるがえって個々人の教育実践の質に対する内発的な動機を向上させる効果が期待される。

シラバスの書式

大学教育開発センターFD支援部会により、シラバス記載上の留意事項が定められており、それにしたがって「概要」、「到達目標」、「授業計画」、「事業時間外の学習」、「成績評価基準」、「評価のポイント」を必ず記すこととし、さらに、各項目に含めるべき内容についての基準を遵守し、精粗なくシラバスを作成している。

とくに、本学部の科目については、担当教員にかかわらずカリキュラム体系の中で決まっている「科目記述」を基準にして「概要」、「到達目標」、「授業計画」を記載することとしており、教員ごとの創意工夫を排除しない範囲で内容上の統一が図られている。

授業の方法、内容、年間計画の明示

大学教育開発センターFD支援部会により、各科目の「概要」、「到達目標」、「授業計画」、「授業時間外の学習」について以下のようにシラバスに記すことが定められており、本学部でこれを遵守することにより、授業の方法、内容、年間計画が明瞭になるように配慮している。

- 概要は、科目全体の内容、ねらい、キーワード、授業の進め方を分かり易く記載する。
- 到達目標は、学生を主語に「～ができるようになる」というように、知識、技能、態度について、具体的な到達目標を記載する。
- 授業計画は、学年暦に定める所定の授業回数を想定したものとし、各回の授業計画を可能な限り具体的に記載する。
- 授業時間外の学習は、予習、復習等、授業時間外に必要な学習について可能な限り具体的に記載する。

成績評価基準の明示

大学教育開発センターFD支援部会により、各科目の「成績評価基準」、「評価のポイント」について以下のようにシラバスに記すことが定められており、本学部でこれを遵守することにより、成績評価基準が明瞭になるように配慮している。

- 成績評価基準は、複数の評価項目を使用することを前提とし、各評価項目の最終成績に占める割合を「%」で明記する。
- 評価のポイントは、評価毎にどのような点が評価のポイントになるか、可能な限り具体的に記載する。

さらに、実験・演習科目をカリキュラムの中心におく本学部の性質上、複数教員が同一の科目を小クラスに分けて担当することが多く、その際の成績評価基準にずれが起きないように、より細かな成績評価基準を各科目で統一的に設け、学生に明示する旨の申し合わせを定めている。